

編 集 後 記

<佐 野 量 造>

私達国立がんセンターグループが早期胃癌図譜を出版した当時は早期癌が100例程度であった。編集委員がそれぞれの立場から肉眼分類を検討しているうちに、小形の Borrmann II 型様の外見を呈する何例かの症例に遭遇し、これをどのように分類するかで議論が沸いた。その結果、周辺が隆起し中央の陥凹しているものを IIa+IIc 型という分類で統一しようではないかということで、どうやら意見がまとまった。その当時のこの型の早期癌は粘膜下層に深く浸潤したものばかりであったが、その後年数がたつにつれて粘膜内の癌でもドーナツ型または環状を呈するものが出てきた。一方この名称が一般に使用されてくると人によっては Borrmann II 型様のもののみに IIa+IIc を限定すべきである、粘膜のものは IIa または IIc でよいではないかという意見が外部のあちこちから出てきた。

どうもこのような分類の混乱を招いた責任の一端は私達にありそうなので、本号の座談会に私の試案を提出して検討をお願いした。来年はたまたま現行の早期胃癌肉眼分類が採用されてから十年目にあたるので、これに関係する問題が各方面でとりあげられると思うが、その意味でこの特集号がまず最初の“たたき”台になって貰えれば幸いである。